

## 【トピックス特別ニュース稿】

☆ 岡澤敏男(旧 15 回生)・赤澤征夫(新 9 回生)・仲村重明(新 22 回生)の三名による、岩手中学の同窓生であり、元盛岡郵便局の職場で同僚の、石川徹氏(旧 16 回生盛岡市在住)への合同インタビュー(メモ)から

### ★新証言・「盛岡郵便局」勤務時代の村上昭夫について

盛岡は森の都、城下町であり水の街である。市内中心街を左右に分かたれて、本流の北上川と合流するまで流れる清き中津川には、いくつもの橋が、城南と城北、河南と河北をつなぎ通わせている。中央の橋がその名のごとく「中の橋」である。そこから二つの河の合流地に至って、「不来方」こと盛岡城跡が座っているのだ。北の小京都とも称される風情が、幸い今日でも色濃く残っている地区一帯だろう。現在の「おでってプラザ」から「啄木・賢治青春館」の路並みである。

終戦後まもなく、岩手銀行の対面、中の橋界わいの町並みの中に、村上昭夫の勤め先の旧盛岡郵便局があった。昭夫たちの職場は、同じ通りにあった店「飲食店カフェー・文化」(レコード喫茶)に、憩いと集いの場として同窓生の石川徹氏らと、昼食時や退社後も通いつめた。戦後、盛岡最初のモダンな店として、盛岡の文人たちもレコード鑑賞などの目的で、足蹴く出入りしたサロンでもあったようだ。野村胡堂も関与していた店でもある。戦後の盛岡文化の復興発展に尽力された鈴木彦次郎、森荘巳池、らが常連客である。高村光太郎も来ていたらしい。近くに「赤沢号レコード部」もあったことから、〈あらえびす〉たる野村胡堂も、荘巳池との交友から指導的な関与をしていたという。いずれこの喫茶「文化」が、いわば戦後の新しい盛岡の、芸術文化の発地点であったとも見て取れる。結核の発病前の昭夫にとって、もっとも充実していた青春期のことであった。

この頃、この場所での彦次郎との出会いが、後の岩手芸術祭において、昭夫の詩人としてのデビューを促す文化的環境になった。昭夫は当時、職場の文化活動の方に忙しく奔走していて、混声合唱団を組織して熱心に指導にあたるほか、組合の機関紙や職場の文芸雑誌「息吹」の編集長を精力的に務めている。すでに俳句などは「岩手日報」に投稿を始めていたが、昭夫作品の第一詩「友に捧ぐ」も、この「息吹」において自ら発表していた。彦次郎とは、講演の依頼を引き受けて頂いたことなどで、とくに交友が深かった。昭夫にとって、本格的な詩作の前に先行して小説「腕」や「浮情」を書かせた理由に、小説作家としての彦次郎の励ましと、創作への勧めがあったものかは不明であるが、何らかの影響を受けたのでは……。

また、同じくサロン仲間であった詩人の森荘巳池が、宮沢賢治全集の編纂者であったこともあり、昭夫は先行して認知していた石川啄木に続けて、賢治の存在を当然に、日蓮宗「国柱会」入信も含めて承知していたらしい。近くの「文明堂書店」に賢治の童話も売られていたが、当時はまだ無名に近かく不人気で、宗教の問題もあって売れ残っていたと記憶すると言う。

この郵便局勤務時代のエピソードとして、昭夫を含む石川氏ら五人ばかりの同僚たちと、花巻温泉から高村光太郎宅に向う道の途中で、写真に見ると同じ〈背高く黒のゴム長靴で雨傘を持った光太郎〉に五人ほどの一行が偶然に出くわし、立ち話ならぬ〈道端座り〉でしばし会話をしたという。すでに旧知の昭夫が、後に俳号を「鈍牛(どんぎゅう)」とした由来に思い当たる。昭夫は、啄木も賢治も光太郎も、尊敬し学び、そしてこよなく愛着したのである。

【 追加証言より 】 ① 「文化」で昭夫が好きで良く聴いたクラシック音楽レコード曲は、主に「ドビッシェーの名曲であった」とされたが、啄木絡みのワーグナーの「ジークリフリート牧歌」も好んだかもしれない。② NHK喉自慢(鐘三つ)の出演は、周囲から押されての他薦によるものだった。「さすが合唱団のリーダー」と言われた。③ 読書で推奨していたのは横光利一(康成・彦次郎らの新感覚派文学)の小説で、特に「山並みなどの自然風景描写が優れている」と評したという。彦次郎が読むように薦めた可能性がある。④ 何事にもけして〈出しゃばる〉ことのない、中学の頃からの大人しい性格であったが、頼まれ事は引き受け

る男気を時に発揮し、司会なども上手く、周囲からの人望が高かった。⑤ また、声も良くハンサムだったので若い女性たちからも信頼があり、組合活動での協力も得て、人徳もあった。⑥ 筆まめな「昭夫からは多くの手紙をもらった」が、「あいにく火事で全て焼失した」と残念なられた。

（取材注） 証明原本は「息吹」五号・八号の証言文で、「彦次郎へのお礼」が記されている。事実証言は、昭夫と同窓生(岩手中学校)で職場(盛岡郵便局)が一時期に同じだった友人・石川徹氏の談話による。岩手芸術祭における昭夫の関与関係については、実行委員会編『50回記念誌・岩手芸術祭のあゆみ』に詳しいデータが記述されている。

（研究上の成果） 昭夫の生涯年譜において、長らく一番の空白となっていた盛岡郵便局時代の村上昭夫の生活と文化活動・交友が、未知の新証言でかなり判明してきた意義は大きい。終戦帰国後の昭夫が誤解されて、突然に神の啓示のように目覚めて詩人文学者に成ったのではなく、死ぬかと思った過酷な戦争体験で性格が一転して変貌したのではなく、戦後国民の大多数がそうであったように、新しい日本の文化建設に、積極的に自由や民主主義、人間性を尊重する社会的な活動に身を投じた市民文人と思われる。しかし、研究当初からの予想を明確に裏付ける貴重な証言である。昭夫の三つの空白期の残り、すなわち「終戦日直後から放浪引き揚げ実家帰郷までの時期」と「手術治療と静養の仙台厚生病院入院の時期」が未だに不明であり、調査が期待される。(以上)